RIRC
宗教情報リサーチセンター

（公財）国際宗教研究所　宗教情報リサーチセンター

20周年記念誌・国内

→デジタル版公開ページ　http://www.rirc.or.jp/20th/20th.html

＊印刷してご利用の際は 2 頁目以降を印刷して下さい。

〈新しい聖地ネットワーク〉の進展

天田顕徳

はじめに

本章では、宗教や宗教文化を契機として形作られた地域間交流の存在に注目し、その特徴を整理する。今日では、国内外の宗教団体のボーダレスな活動の展開や、様々な教団による国際的なネットワークの形成に加え、従来あまり見られなかった形の「宗教が関わる」国際的な交流や協力関係が新たに出現している。まずは、こうした本章の議論の対象について述べておきたい。

宗教が契機となり、ある地域と他の地域との間に交流が生まれるという現象自体は、さほど目新しいものではない。とりわけ、伝統的な聖地巡礼は、宗教が契機となった都市間ネットワークを形成する代表的な例になっている。聖地巡礼とは、宗教的に特別な地位を与えられた場所への旅を指し、西国巡礼やお伊勢参り、サンティアゴ巡礼やメッカ巡礼など、洋の東西を問わず、広く世界で行われてきた宗教実践である。そこでは世界の大都市から宗教的な聖地に向けて人が移動するということも起こる。人が移動するということは、必然的に物や金の移動も生み出すことになる。いわゆる「ヒト・モノ・カネ」が移動することで、道中の地域には、道や交通手段といったインフラ整備が要請され、商業や宿泊などのサービス業の発達も促される。

近世における伊勢と江戸間の街道や宿場町の関係などを思い起こしてみてもわかるように、巡礼という宗教実践は、いわば都市と目的地の間にある様々な場所をネットワーク化していると考えることができる。多くの巡礼研究を見ると、こうした事例は枚挙にいとまがないことが分かる[1)]。つまり、宗教は隔たった場所どうしを結びつける一種のネットワークを〈これまでも〉形成してきたということである。そのことを踏まえて現代社会に目を移すと、聖地巡礼以外にも宗教が契機となった〈新しい〉都市間ネットワーク形成の事例を見出すことができる。

具体的な事例をみてみよう。「綾部市がエルサレムと友好都市に日本の自治体で初めて」と題された2000年2月9日付、「京都新聞」の報道である。

> イスラエルの首都エルサレム市と友好都市宣言を締結することになった京都府綾部市は九日、駐日イスラエル大使を招いて署名式を行い、四方八洲男市長が「世界の恒久平和を実現する」との宣言文書にサインした。エルサレム市と日本の自治体が友好都市宣言を結ぶのは初めてで、宗教法人・大本が仲介した。
>
> 署名式は午前十時から同市西町のＩ・Ｔビルで行われ、モシェ・ベンヤコヴ大使夫妻、大本の出口聖子教主、ヘブライ大学の辻田協二理事、地元各界の代表ら二百人が出席した。

エルサレムはユダヤ教・キリスト教・イスラム教という３つの宗教の聖地となっていることで知られている。他方、綾部市には、日本の新宗教である大本の聖地がある。この友好都市宣言以降、代表者による相互訪問や、綾部市がイスラエルとパレスチナの紛争遺児を日本に招いて交流を図る「中東和平プロジェクト」を推進するなど、両都市間の交流は現在も続いている。交流のきっかけをとなった大本の「仲介」の内実については、宗教専門紙の「中外日報」が、その内容について一部報道している[2)]。ここでいう「友好都市」は、冒頭で述べた伝統的な聖地巡礼の作る地域間ネットワークとは、いくつかその性質を異にしているといえる。先に紹介した伝統的な聖地巡礼の作り出した地域間ネットワークは、一定の限られた場所の中で繰り返される聖地巡礼という宗教行為が、特定の地域に対面的な相互行為を生みだした結果育まれた地域間ネットワークである一方、綾部とエルサレムの事例は、従来的には往来のなかった２つの聖地が場所を越えてネットワークを形成している事例である。

本章では後者のような事例を議論のターゲットにする。グローバル化やボーダレス化が叫ばれて久しい今日、我々の身の回りには宗教の違いや場所の制約を超えた、宗教が契機となった地域間ネットワークが多数生まれてきている。本章ではこうした事例を、以降〈新しい聖地ネットワーク〉と呼ぶこととし、幾つかの事例に光を当てて、その特徴について整理する。

1. 交流の「文化資源」としての宗教

報道された内容に基づくと、綾部とエルサレムの友好都市宣言は、教団の仲介があったにせよ、基本的には教団や信者の「外側」で行政が主体となって形成された都市間ネットワークということになる。〈新しい聖地ネットワーク〉は、綾部・エルサレムの例のような「行政主導のネットワーク」が数多く存在していることに 1 つの大きな特徴がある。本節ではまず、行政が主導した〈新しい聖地ネットワーク〉の事例を 2 つ取りあげる。取りあげる事例は、長崎県長崎市とフランス・ヴォスロール村の交流と、和歌山県橋本市と中国・泰安市の交流である。交流の前史が古い長崎の事例から確認する。

・事例 1（2004 年 長崎市・長崎／ヴォスロール村・フランス）

2004 年 12 月 29 日、長崎県長崎市とフランス北西部ノルマンディー中部海岸沿いの村、ヴォスロール村が「長崎市とヴォスロール村との姉妹都市提携に関する確認書」を交わし、姉妹都市となった。長崎市が、前年に同市と合併した旧外海（そとめ）町とヴォスロール村との姉妹都市提携を引き継いだのである。では、旧外海町とヴォスロール村の姉妹都市提携の背景には何があったのだろうか。そこには、日本の地で社会福祉事業に貢献した一人のフランス人宣教師の存在がある。

1840 年にヴォスロール村で生まれたマルク・マリー・ド・ロは 1868 年、パリ外国宣教会所属の宣教師として来日した。彼は長崎や横浜などで宣教に従事した後、1978 年に出津協会の主任司祭として外海地区の司牧の任に当たり、日本でその生涯を閉じている。孤児院や救助院、診療所などを開設し、貧困に喘いでいる多くの家庭に救いの手を差し伸べたとされる。旧外海町では、このド・ロ神父の功績を顕彰するために、1968 年、ド・ロ神父の遺品を集め、彼自身が設計施工した鰯網工場を「ド・ロ神父記念館」として整備している。現在同施設は「旧出津（しつ）救助院（鰯網工場）」として国指定の重要文化財にも登録されている。

さらに、旧外海町はヴォスロール村に対し「ド・ロ神父の人類愛の精神を引き継ぎ、国際平和の促進に役立てよう」と姉妹都市提携を打診。1978 年に平野武光外海町長がヴォスロール村を訪問し、両地域は姉妹都市となった。2 年

後の 1980 年には「両町の親善と文化・人的交流を促進し、世界平和と繁栄に寄与することを目的」として外海・ヴォスロール姉妹都市委員会が発足している。

その後、旧外海地区とヴォスロール村では、祈念像の建立[3]や祈念広場の設置[4]などが行われたほか、外海からヴォスロール村への少年使節団の派遣（1984 年）や、ヴォスロール村青年使節団による外海農業事情の視察（1986 年）などの人的な交流が行われている。両都市の交流は今世紀に入っても行われており、2013 年 10 月 2 日から 27 日には、長崎市立図書館で姉妹都市提携 35 周年を記念したヴォスロール村の写真パネルが展示された。その後は報道や広報ベースで見る限り、大きな交流の様子は報じられていないものの、市は老朽化するド・ロ神父の史跡保存や修復に力を入れている[5]。

・事例 2 （1987 年 橋本市・和歌山県／泰安市・中国 ）

1987 年に和歌山県橋本市と中国の泰安市の間で結ばれた友好都市提携の事例の場合、先の事例のような卓抜した宗教者が都市交流のきっかけとして登場するわけではなく、泰山と高野山という 2 つの聖山、すなわち宗教的な「場所」が交流のきっかけを作っている。

泰安市は山東省の中西部に位置し、市内には道教の聖地五岳の筆頭、泰山がある。泰山は、時の皇帝が天と地に即位を知らせ、天下太平を祈る封禅の儀式が行われた場所としても知られている[6]。いわば、中国の伝統的な宗教文化の一大センターであった泰山の麓にある泰安市は、歴史的に多くの参拝客や文化人の集まる地であった。一方、和歌山県の北東端に位置する橋本市は、空海が開いた真言密教の聖地、高野山の北麓に当たり、市内からはその山容を眺めることができる。高野山が日本の仏教史上極めて重要な場所であり、現在も聖地として広く信仰を集めている。

こうしたそれぞれ聖山の麓に位置する両都市が交流を結ぶきっかけとなったのが、1985 年 3 月の山東省城鎮開発建設考察団による橋本市の視察訪問である。同視察団が橋本市を訪問したのは、和歌山県と山東省が友好都市として提携していたことに加え、両市がともに大規模開発の途上にあったことが理由であったという。その際、両都市が泰山と高野山という聖山の麓にあるという共通点を活かし、友好都市提携の推進を申し合わせている。橋本市は同年 9 月の市議

会定例会で両市の提携締結を議決し、2年後の1987年5月に当時の泰安市長らが来日して、橋本市で友好都市関係締結議定書の調印式が行われた。その後、両市は代表団の相互訪問や農業、商工業考察団の交流、語学研修生の派遣や受け入れなどの交流を行っている。また、近年の交流としては、2012年に北京で開催された「日中友好交流都市中学生卓球交歓大会」に、両都市の中学生が合同チームを組み参加している。ただ、とりわけ聖地に関わりのあるイベントは催されていない。

両事例ともに、行政が主導した都市間ネットワークではあるものの、長崎の事例ではド・ロ神父という宗教者の活動が、和歌山の事例では「聖山の麓」であるという地理的な特徴が、それぞれの都市間を結びつけるための紐帯として使われている。両事例からは宗教文化が少なくとも都市交流を開始するための推進力となる文化資源として活用されている様子を見出すことができる。

2. 観光における宗教文化資源の活用

行政が主導する都市交流において、宗教文化が文化資源として活用されるという事態について、少し踏み込んで考えてみたい。姉妹都市交流を始めとする自治体間の国際交流に関する情報や資料の収集・提供を行っている一般財団法人自治体国際化協会（CLAIR／クレア）によれば、「姉妹都市」や「友好都市」と呼ばれる地域間ネットワークは以下の3要件を満たすものを指すという[7]。

1．両首長による提携書があること
2．交流分野が特定のものに限られていないこと
3．交流するに当たって、何らかの予算措置が必要になるものと考えられることから、議会の承認を得ていること

日本には姉妹都市や友好都市に関する法令上の定義が存在しないため、これらに一般的な定義を与えることは難しい。一方で、上記3要件を満たすものを「姉妹都市」や「友好都市」と呼ぶという方法は、国土交通省にも採用されており[8]、姉妹都市や友好都市の要件を理解する上で上記は参考になる基準となる。また、こうした地域間交流において、交流を取り結ぶ両地域の最大の眼目となるのが、

双方の「地域振興」である。一般社団法人自治体国際化協会は「グローバル化が進展する中で、自治体においても地域の活性化を図るため、海外との地域間連携の重要性が高まって」[9] いるとしており、自治同士が姉妹都市や友好都市を提携する背後には、単一の地方自治体のみで地域の活性化を図っていくのが難しいという実情が横たわっている。

こうした事情を念頭において、もう一度本論の議論に立ち返ると、宗教文化を文化資源にした地域間交流が、地域にどのようなメリットをもたらすのかという疑問が出てくる。先の橋本市と泰安市の事例の場合、両地域が同時期に大規模開発をしていたということが交流の端緒となったため、「聖山の麓」であるというロジックはある種、後付け的に用いられたものである。しかし、長崎の事例ではどうだろうか。宣教師の事績に光をあてることで、長崎とヴォスロール村にはどのようなメリットがあったのか。無論、現地において宗教者の事績に対する尊敬の念や畏敬の念があったことも間違いないだろうが、本論がここで問題にしたいのは、宗教資源を活用する行政の思惑である。議論を前に進めるために、新しい事例を見てみよう。

・事例３（2009 年 高野町・和歌山県／アッシジ市・イタリア）

2009 年 10 月 26 日、和歌山県高野町とイタリアはアッシジ市との間で「日伊世界遺産都市の文化・観光相互促進協定」が結ばれた。「クリスチャン・トゥデイ」の報道によれば、1986 年にアッシジ市で開かれた世界宗教者会議の折、当時の高野町長がアッシジ市長へ親書で「宗教都市同士の交流」を呼び掛けたことが両地域間の交流の嚆矢となった [10]。交流を決めたアッシジ市は 2000 年に「アッシジ、フランチェスコ聖堂と関連修道施設群」として、高野町は 2004 年に「紀伊山地の霊場と参詣道」としてそれぞれ世界遺産に登録をされており、双方が宗教に関わる「世界遺産都市」であるとして交流を決めたという。協定後、両都市は互いの都市を紹介する写真展や宗教美術品展の開催、市民交流などを行っている。また近年では、高野町がふるさと納税の返礼品としてアッシジへの旅行をプレゼントしていた [11]。

この協定は、姉妹都市や友好都市の基準となる先の３要件を満たすものではあるものの、名称を「文化・観光相互促進協定」としており、「友好都市」や

「姉妹都市」よりも協定の目的が明確になっている[12)]。協定を文化事業の促進や観光振興に役立てたいという両者の思惑が、協定の名称に端的に示されているのである。世界的に観光が重要な収入になっている現代社会においては、こうした趣旨の協定は当然であろう。世界観光機関（UNWTO）の発表によれば、2016 年の世界各国の観光収入の合計である国際観光収入の総額は、前年度から 2.6％増の 1 兆 2,200 億米ドルであったという[13)]。これは世界全体の GDP 総額の 10％にあたり、観光は現在世界最大の産業となっている。高野町とアッシジが地域振興ために観光事業に注力することは、合理的な選択であると言える。しかし、上述の報道だけでは高野町とアッシジ市が文化・観光促進協定を結ぶことで双方に具体的にどのような利があるか、という点が明確になっていないように思われる。

他の資料を確認してみよう。2016 年に和歌山県産業観光課が全国町村会[14)]を通じて発表した「高野町におけるインバウンドの取り組み」というレポートに、アッシジ市との協定に高野町が具体的に何を望んでいるのかという点が端的に示されている。少々長くなるものの、本論にとって重要な示唆が含まれているため、以下に引用しておきたい。

「増え続ける外国人観光客」

高野山への外国人観光客の入り込み数は、世界遺産に登録された 2004 年（平成 16 年）を境に顕著な伸びを見せています。2014 年（平成 26 年）の 1 年間に、54,511 名の外国人が高野山に宿泊し、宿泊客全体の 20％、 5 人に 1 人を外国人が占めるまでになっています。特にヨーロッパ諸国、特にフランスからの訪問者の比率が高いのが特徴です。私たちは、この特徴には理由があると考えています。

ひとつは、「キリスト教（ローマ正教）と仏教（真言密教）の違いはあるが、根底に宗教の基盤があり、日常のそこここに相通じるものを持つ」ということです。例えば、ヨーロッパの教会で「早朝ミサ」に列席する。高野山の宿坊の本堂で早朝「勤行」に参加する。宗教の違い、場所の違いはあるもののそこには雰囲気も含め全く同じ敬虔な「 祈りの光景 」が広がっています。

また、「どちらにも『巡礼の文化』が根付いている」という点も見逃せません。ヨーロッパには、キリスト教の巡礼地として、エルサレム（イスラエル）、ロー

マ（イタリア）、アッシジ（イタリア）、サンチアゴ・デ・コンポステーラ（スペイン）などがあり、毎年多くの人々が参拝や観光に訪れます。特に近年サンチアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼は人気が高く、年々その数が増えているといわれています。日本においても、「高野詣り」、「四国八十八箇所巡礼」や「西国三十三箇所巡り」などが盛んに行われています。この共通性は非常に重要なファクターであると考えています[15]。

このレポートでは、冒頭で世界遺産登録以降、高野町を訪れる外国人観光客、なかでもヨーロッパからの観光客数が顕著に伸びていることが指摘されている。レポートは高野町を訪れるインバウンド全体の傾向を分析したものだが、アッシジ市との協定にもこうした世界遺産登録後の観光客の動向が踏まえれており、高野町はアッシジ市との協定を「ヨーロッパ諸国などキリスト教圏からの観光客を誘致するための切っ掛けとして大いに活用していきたい」[16]（強調筆者）としている。また、レポートでは、観光客増の原因をヨーロッパと日本が「祈りの光景」と「巡礼文化」を共有しているという点に求めており、高野町とアッシジ市との間で結ばれた文化・観光相互促進協定の「文化」という語の背景には、双方の宗教文化が強く意識されていることが伺える。このことから、協定において目指されている地域振興の内実は、宗教文化を資源とした観光振興であるとみてよいだろう。高野町は「祈りの光景」や「巡礼文化」という宗教文化を資源として、同じ宗教文化を共有する（と考えている）アッシジ市からの観光客増を狙ったのである。

以上を踏まえた上で、長崎の事例を振り返ってみると、長崎市の事例にも、高野町と同様の事情が見えてくる。長崎県と熊本県のキリスト教関連資産が 2018 年に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として世界遺産に登録されたことは記憶に新しいが、長崎にとってキリスト教関連資産は、世界遺産登録以前から重要な観光資源だったといえる。世界遺産登録運動自体も 2001 年には民間の「長崎の教会群を世界遺産にする会」が発足しており、長崎市が旧外海町を合併した 2004 年には既に、著名な宣教師の事績は観光資源としての価値を期待されていたのである。長崎市が外海町から友好都市を引き継ぎ、新たにヴォスロール村と友好都市提携をした背景にも、宗教文化を用いた観光振興を前進させたい長崎市の思惑があったとみることができるだろう。

宗教社会学者の山中弘や岡本亮輔らは近年の日本やヨーロッパにおいて、伝統的に「聖地」と呼ばれてきた場所がツーリズムの対象としても人気を集めているという現象に注目し、宗教とツーリズムの相互陥入的な様子を紹介しているが[17]、聖地が巡礼者からも観光客からも「訪れるに値する場所」として広く人気を集めるという現象は、行政が宗教文化を資源とした観光振興策に期待を寄せる大きな要因となっているのだろう。

3. 行政の動きに対する宗教教団の対応

では、行政による宗教文化を観光資源化とした〈新しい聖地ネットワーク〉の形成に対して、「資源化される側」でもある教団はどのような対応をみせているのだろうか。報道やプレスリリースをベースとして見る限りにおいて、教団の対応も行政の施策には概ね好意的な事例が多いようである[18]。これは、聖地を訪れる人間が増えるということは教団にとっても、ある種の好機として捉えられるからであろう。ここでは〈新しい聖地ネットワーク〉に教団が協調し、新たな宗教文化が創設されるまでに至った事例を紹介してみたい。

・事例 4（2015 年 田辺市・和歌山県／サンティアゴ・デ・コンポステーラ市・スペイン）

熊野三山の一角、熊野本宮大社を擁する和歌山県田辺市と、サンティアゴ巡礼の目的地で聖ヤコブの墓があるとされるスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ市は、2014 年 5 月に観光交流協定を締結した[19]。日本とスペインの交流が 400 年をむかえること、並びに、熊野三山を含む「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録 10 周年を記念してのことである。田辺市とサンティアゴ・デ・コンポステーラ市は、それぞれ、熊野巡礼とサンチィアゴ巡礼のための巡礼路を地域内に有しており、互いに世界遺産に登録されている巡礼の道を生かした「持続可能な観光地づくり」と「巡礼文化の世界発信」を協定の目的とすることで合意している。

この事例において注目したいのは、両地域が上述の協定の目的達成のために、神社と教会公認のもと、協定締結翌年の 2015 年 2 月 1 日より「共通巡礼手帳」を発行し、「二つの道の巡礼者」登録制度を開始したという点である。「二つの

道の巡礼者」登録制度とは、熊野巡礼とサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼の、二つの巡礼を達成した人を「二つの道の巡礼者」として顕彰する制度である。二つの巡礼達成者は専用の Web サイトで紹介されるほか、達成者には、太陽のイメージであるオレンジ色にサンティアゴ巡礼のシンボルであるホタテ貝と熊野詣のシンボルである八咫烏があしらわれた限定ピンバッジ、並びに熊野本宮大社が発行する共通巡礼達成証明書が授与される。以下の写真は登録者を紹介する専用ウェブサイトの様子である [20)]。サイトでは「二つの道の巡礼者の写真と名前、国籍、歩いた巡礼路と日付が記されている。

この制度において「二つの道の巡礼者」として認められるためには、熊野とサンティアゴそれぞれの道で巡礼を達成する必要があるが、それぞれに達成要件が設定されている。達成要件は以下の通りで、それぞれの道において、以下いずれかの条件を満たす必要がある。

サンティアゴ巡礼
・徒歩または馬で少なくとも最後の 100km 以上を巡礼する
・自転車で少なくとも最後の 200km 以上を巡礼する

熊野巡礼
・徒歩で滝尻王子から熊野本宮大社（38km）まで巡礼する
・徒歩で熊野那智大社から熊野本宮大社（30km）間を巡礼する
・徒歩で高野山から熊野本宮大（70km）まで巡礼する
・徒歩で発心門王子から熊野本宮大社（7km）まで巡礼するとともに、熊野速玉大社と熊野那智大社に参詣する

両巡礼は、それぞれの巡礼路上に設置されているスタンプを巡礼手帳に集めることで、条件達成が証明される仕組みとなっている。条件を達成できた巡礼者は、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ市観光局及び、本宮大社前の観光センターである世界遺産熊野本宮館、または、田辺市観光センターのいずれかに直接足を運んで申し出ることで、「二つの道の巡礼者」として認定を受けることが出来る。

既に述べたように、この制度は行政が主導する都市間ネットワークにより作られた制度であるにもかかわらず、神社や教会の公認を得ており、世俗側の思惑と宗教側の思惑、両者の思惑が協働し維持・推進されている。例えば、「二つの道の巡礼者」を登録するのは、観光協会や観光案内所などの世俗的な組織であるものの、ここでいう巡礼は教会・神社双方によって宗教的に「本物の巡礼」と位置づけられている。登録に使われる「共通巡礼手帳」は片面が熊野古道、もう片面がサンティアゴ・デ・コンポステーラの道のスタンプ台紙となっており、観光協会など[21]で無料で配布されているものの、サンティアゴ大聖堂よりサンティアゴ巡礼の際に有効に使えるものとして、従来のサンティアゴ巡礼における巡礼手帳と同様の扱いを受けており、サンティアゴ巡礼の面には “official” の表記が付されている。また、サンティアゴ側の巡礼達成条件も、実際のサンティアゴ巡礼で巡礼証明書が発行される条件に準じている。

一方、熊野巡礼は巡礼手帳を使う制度が存在していなかったため、共通巡礼手帳の熊野側の面には “official” 表記がない。しかし、熊野本宮大社では熊野側で 2 つの道の巡礼を達成した巡礼者のために、「共通巡礼達成大太鼓の儀」

共通巡礼手帳の写真 [22]

という特別な儀式を催行している。同儀式は「古来より和太鼓の音は始まりと終わりを象徴しており、普段は一般の方は叩くことのできない熊野本宮大社拝殿横に備えられている大太鼓を、二つの道の巡礼達成者自らが叩くことにより、二つの道の巡礼を締め括るとともに熊野の神々や聖ヤコブにご自身の想いを伝え、納める儀式」であるという [23]。熊野本宮大社の同制度を歓迎する姿勢が伺える。

「二つの道の巡礼者」制度は人気を博し、制度創設から 3 年あまりの 2018 年 2 月 21 日には「二つの道の巡礼者」は 1,000 名に達し、現在もその数を増やし続けている [24]。1,000 名時点での性別内訳は、男性 484 名、女性 516 名で、若干女性が多く、国別登録者数でみると、多い順に日本 246 名、オーストラリア 198 名、アメリカ 125 名、スペイン 113 名、イタリア 32 名、その他 40 カ国が 286 名であるという。一人一人の年齢や職業、巡礼動機などの詳細は公表されていないものの、田辺市観光振興課は 1,000 人目の達成者であるアメリカ人男性のスティーブン・バグノ氏にインタビューを行い、その内容の一部を公表している [25]。

バグノ氏はアラスカ州アンカレッジ出身の38歳男性で、旅行会社を経営しフリーライターとしての仕事も行っているという。2005年と2008年に、それぞれフランスからサンティアゴ、スペインからサンティアゴまでの巡礼路を計62日間、距離にして約1,600キロほど歩いたという。二つの道の巡礼者制度を知ったのは2017年に二つの道の巡礼を達成した友人からの紹介がきっかけであった。日本にくるのが4回目であったという彼は、2018年2月20日～2月21日までの2日間、1人で熊野歩き、巡礼者登録の際に自分が1,000人目の登録者となったことを知ったという。

彼は田辺市観光課によるインタビューに次のように答えている。

（以下引用中●印はインタビュアー）

●共通巡礼達成1,000人目となった今の気持ちを聴かせてください。

とてもうれしくてエキサイティングな気持ちになった。歩いた後で足が疲れていたが、このようなサプライズな歓迎を受けて力をもらえた。日本に来るのは4回目だが、これまで日本人との交流があまりなかったので、今回こうした交流ができて楽しかった。

●あなたは、この共通巡礼の取組をどう思いましたか？

とても良い取組だと思う。観光関係の仕事をする者としての目線で見ても、サンティアゴ巡礼道と熊野古道を組み合わせることは、マーケティング戦略としても良いし、巡礼者にとっても楽しめる取組だと思う。

●熊野古道を歩いた感想を聴かせてください。また、熊野古道の中で、一番印象に残っている場所はどこですか？

（感想）とても良い経験になった。普段の忙しい生活を離れ、静かな時間・場所の中で自分自身を見つめ直す、まさに巡礼の旅となったのが良かった。

（印象）熊野の森が印象的であった。また、集落の風景や暮らしぶりを見ることができて良かった[26]。

インタビューにおいて同氏がいみじくも語ったように、「二つの道の巡礼者」制度には、「マーケティング戦略」と「巡礼」という、世俗的な次元と宗教的な次元が共存している。また、ここで使われる「巡礼」という用語も、伝統的な

それではなく、キリスト教における巡礼と日本の巡礼を組み合わせたハイパー・トラディショナル[27]なものとなっている。本事例は、〈新しい聖地ネットワーク〉が、地理的なボーダーや宗教と世俗のボーダー、宗教間のボーダーなど、多様な従来的なボーダーを超えながら展開し、人々から関心を集めていることを示す好例である。

むすび

以上、本論では我々の身近にある〈新しい聖地ネットワーク〉の展開について事例を紹介した。本論は従来的な聖地ネットワークが現在も存在する一方で、宗教と関わるエピソードや物語などを資源化しながら、世俗的なアクターが都市ネットワークを形成する〈新しい聖地ネットワーク〉が生まれてきているという事実に注目したものである。こうした事態は、既に確認してきたように、「宗教の外側に、単に宗教の名を借りた世俗的な試みが展開している」というような聖俗二分法的な理解の範疇に収まるものではないことを指摘しておきたい。田辺市とサンティアゴ・デ・コンポステーラ市の事例のように、〈新しい聖地ネットワーク〉は地理的なボーダーのみならず、宗教と世俗や、従来的な教団間のボーダーを超えて、そのネットワークを広げつつある。

冒頭でも述べたように、本章は具体的な宗教団体によるボーダレスな活動の展開や、教団の国際的なネットワークの形成そのものを扱ったわけではない。しかし、本章の事例は現代社会において、宗教文化が文化資源として活用され、消費の対象となっているという一つの現実を我々示している。また、そうした現実に対し、宗教的なアクターもそれをサポートし、利用する動きがあることも紹介した通りである。〈新しい聖地ネットワーク〉の存在は、現代社会における宗教的なアクターと世俗的なアクターとの新たな相互依存・協働関係がどのようなダイナミズムをとっているかを確認するための興味深い事例である。

注

1) 巡礼のもたらす社会経済的なインパクトについては、新城常三『社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房、1964 年が参考になる。

2)『中外日報』は「宗教協力活動を世界的に推進している大本では、これまでユダヤ教徒を招いて諸宗教の合同礼拝式を行なったり、「夏期セミナー」（日本の伝統文化講座）にヘブライ大学の教授が参加するなど、イスラエルとの地道な交流を進めてきた。今回の宣言はこうした交流の積み重ねがもたらした一つの成果といえよう」としている。2000 年 2 月 15 日付。

3) 1984 年、外海に「友情（アミティエ）の象」建立。

4) 1998 年、ヴォスロール村に「そとめ広場」が設置。

5) 例えば、ド・ロ神父にゆかりの製粉工場などの「ド・ロ遺跡」の修復事業が 2007 年から 2013 年まで行われている（長崎新聞 2013 年 4 月 16 日付）。

6) また、宋の時代、中国を代表する 4 つの代表的な寺院として「天下四絶」と称された霊巌寺があったことから、泰山は中国仏教の中心地の一つにも数えられている。また、泰山には孔子にまつわる名所や孔子廟などもあり、同じく宋代には泰山学派と呼ばれる儒学者達が麓に移り住んでいたことなどでもよく知られている。

7) 一般財団法人自治体国際化協会 Web ページより。http://www.clair.or.jp/j/exchange/shimai/index.html（以下 URL は全て 2018 年 9 月最終閲覧）

8) 国土交通省「姉妹都市交流の観光への活用に関する調査」1 頁より。http://www.mlit.go.jp/common/000059350.pdf

9) 前掲一般財団法人自治体国際化協会 Web ページより。

10) クリスチャントゥデイ 2009 年 10 月 15 日付 https://www.christiantoday.co.jp/articles/4278/20091015/news.htm

11) https://www.town.koya.wakayama.jp/img_data/2014/10/45b51e5c0ce9778f21c66f9bf3bbd031.pdf

12) 資料によっては高野町とアッシジを姉妹都市と表記するものもある。例えば前掲のふるさと納税の返礼品リストでは、高野町とアッシジは「姉妹都市」と表記されている。

13) UNWTO「Tourism Highlights」2017edition 日本語版参照。http://unwto-ap.org/wp-content/uploads/2017/11/UNWTO_Tourism_Highlights_2017_Japan_web.pdf

14) 大正 10 年に発足した町村長の全国的連合組織。「町村を中心とした地方自治の振興・発展に向けた政策に関する各種の調査・研究や政府・国会に対する要望、地方行政に関わりのある各種の政府審議会等への参加などの政務活動」を中心に行っている。http://www.zck.or.jp/aboutus/about_us.html

15) 全国町村会 Web ページ「高野町におけるインバウンドの取り組み」より。http://www.zck.or.jp/forum/forum/2949/2949.htm

16) 前掲全国町村会 Web ページより。

17) 山中弘編『宗教とツーリズム』世界思想社、2012 年、岡本亮輔『聖地巡礼』中央公論社、2015 年などを参照のこと。

18) この点については、地域の教団に対し質的な調査を行った場合、異なる回答が得られることも十分に予想される。筆者自身も観光地において観光化に反対する宗教者の意見を幾度も耳にしているが、本論ではあくまでも報道ベース・プレスリリースベースで見た場合、事例がどのように見えるかという角度から事例の整理を行うこととする。

19) 和歌山県田辺市観光振興課「田辺市とサンティアゴ・デ・コンポステーラ市との観光交流協定の締結について」https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/local/pdfs/tanabe1407.pdf

20) http://dual-pilgrim.spiritual-pilgrimages.com/

21) 具体的な配布場所は以下の通り。サンティアゴ・デ・コンポステーラ市観光局、田辺市役所観光振興課、田辺市観光センター、熊野古道館（和歌山県田辺市）、世界遺産熊野本宮館（和歌山県田辺市）、高野山宿坊協会中央案内所（和歌山県高野町）、新宮市観光協会（和歌山県新宮市）、那智勝浦町観光協会（和歌山県那智勝浦町）、わかやま紀州館（東京都千代田区有楽町）。

22) 前掲田辺市熊野ツーリズムビューロー Web ページより。

23) 前掲田辺市熊野ツーリズムビューロー Web ページより。

24) 田辺市観光振興課による統計。http://www.kishukan.com/wp/wp-content/uploads/2018/02/1000%E5%90%8D%E7%AA%81%E7%A0%B4.pdf

25) 前掲、田辺市観光振興課による資料。

26) 田辺市観光による資料より http://www.kishukan.com/wp/wp-content/uploads/2018/02/1000%E5%90%8D%E7%AA%81%E7%A0%B4.pdf

27) 井上順孝は 2000 年以前より現代の宗教の動向をハイパー・トラディショナルな宗教運動、すなわち、ハイパー宗教として捉える分析視角を提示している。井上順孝『若者と現代宗教』筑摩書房、1999 年を参照。